

岩手県現地調査結果報告 【若菜委員報告資料】

- (1)実施日： 令和2年10月2日(金)
- (2)訪問先： 岩手県 釜石市、大船渡市、陸前高田市
- (3)参加者： 伊藤委員長、岩淵委員、白根委員、田村委員、中田スウラ委員、中田俊彦委員
若菜委員
- (4)行 程:
- ① 釜石市
うのすまい・トモス
 - ② 大船渡市
株式会社いわて銀河農園
 - ③ 陸前高田市
高田松原津波復興祈念公園
国営追悼・祈念施設



(5) 結果報告:

① 釜石市

うのすまい・トモス

視察先概要:

平成 31 年3月に完成した釜石市の震災メモリアルパーク。慰霊・追悼施設「釜石祈りのパーク」、震災伝承・防災学習施設「いのちをつなぐ未来館」、観光交流拠点施設「鵜の郷交流館」等から構成。

- 野田釜石市長からの説明の概要は、次のとおり。
 - 釜石市民の犠牲者は1,064名、そのうち鵜住居地区では、震災当日に580名の市民が犠牲になった。その鵜住居地区の防災センターがあったところに整備した『うのすまい・トモス』は、復興の明かりを「灯す」「共に」「友」を意味する言葉の響きと、鉄のまち釜石の炉をイメージした言葉で表現したものである。防災センターでも、多くの方々が亡くなった。地域の方々と協議の上、「釜石祈りのパーク」のほか、伝承施設の「いのちをつなぐ未来館」と交流施設の「鵜の郷交流館」を整備した。
 - 「釜石祈りのパーク」内には東日本大震災の犠牲者を慰霊・追悼する慰霊碑や、震災の教訓を後世に伝えるための津波高のモニュメント、防災市民憲章碑を整備している。津波高のモニュメントは震災時の津波高11メートルを記録するもの。防災市民憲章碑は、震災後に後世に継承すべく定めた市民総意の誓い。震災・津波の恐ろしさと、その伝承のために大事だと考えている。
- その後、いのちをつなぐ未来館内を視察。職員からの説明の概要は、次のとおり。
 - 津波による被害が大きかったため、釜石市民の犠牲者は1,064名、そのうち、鵜住居地区では震災当日に580名の市民が犠牲になった。津波はかつての防災センターの天井下約10センチまで押し寄せ、避難者196名のうち162名が亡くなった。避難所と避難場所はその意味合いが全く異なり、避難場所を知っておくことが重要である。
 - 釜石では、津波避難3原則に基づいて防災教育を行ってきた。釜石小学校では下校時津波避難訓練をやっていたことが生かされ、犠牲者はいなかった。釜石東中学校でも、自分の命は自分で守れるよう、日頃から実践的に防災教育に取り組んできた。普段から取り組むことが大切だと思う。



釜石祈りのパークでの献花・黙とう



いのちをつなぐ未来館の視察

➤ (所感)

- ・うのすまいトモスは、三陸鉄道鶴住居駅周辺に位置しており、慰霊の場としてその場の空間に溶け込みながら、津波の到達ラインや防災センターの基礎石を使ったモニュメントなど、次の世代に津波の悲惨さや防災の意識を自然に心に訴える空間となっており、心を動かされた。
- ・すぐそばにある「未来館」も当時中学生だった案内人の方が時間を持ってお話しされていた。私の子どもは花巻市の中学生であるが、中学校の校外学習で訪れており、彼女の話はとても印象に残ったようだった。
- ・ラグビーワールドカップが開催されたグラウンドも近いことから、国内外の人が集い、交流する場所であると思うが、多言語標記などはやや不十分に感じられたので、その充実も期待される。
- ・また、同時に鶴住居駅前には、鶴住居に住まわれる方の交流スペースも設けられており、交通の乗継拠点ともなっているが、地域の方の交流スペースとしての充実もさらに期待される所と感じた。

② 大船渡市

株式会社いわて銀河農園

視察先概要:

大船渡市末崎町小河原地区の被災跡地に、岩手県内初の生産技術高度化施設(トマトの高度環境制御栽培施設)を建設。国の産地パワーアップ補助金を活用し、施設を整備。平成31年2月に施設が完成し、3月からテスト栽培を開始。

- 冒頭、戸田大船渡市長より、「復興10年の最終年にハード整備は終えようとしている。被災跡地利用の重要性については、従来から指摘していた。そうしたところに、本施設が設置されることとなった」との挨拶があった。

- 橋本代表取締役からの説明の概要は、次のとおり。
 - まず、組織について、県外の株式会社サラダボウルのグループとして連携することで、一定の品種で時期をずらして作付けし、年間を通して出荷量を調整でき、また、大手を含む出荷先・販路の確保や大規模経営の知見の活用など、安定経営を実現している。
 - 施設整備に当たっては、対象の被災跡地において、行政が防集事業で買い取った市有地と民有地が混在していたことから、同社において民有地を買い取り、市に寄付した上で、用地全体を市が復興交付金を活用して産業用地として整備し、当社が借り受ける形式をとっている。
 - 当社の生産手法として、養液栽培を採用しているために土壌の影響を受けず、以前は住宅地等であった現在の用地でも農業が可能となっている。住居の用に供する建物の建築が禁止されている地域を活用することで、復興にも寄与できる。
 - 従業員は地元の方を多く採用しているほか、他県や海外からも採用している。農業においてもライフスタイルは多様になっていることから地域間での人材の交流を図り、また、将来的に母国で農業に従事するための知見を蓄積してもらうためである。
 - 施設においては、従業員が腰を曲げなくても収穫作業ができるよう栽培の高さを調整するなど、作業による負荷をかけない構造を採用している。
 - 日本一でなくてもよいので、ここで働く人が、ずっと農業を続けられるような強い施設を目指したい。

- その後、園内を視察。設備の紹介と併せて、橋本代表取締役からの説明の概要は、次のとおり。
 - 本施設のような大規模な生産施設については、オランダなど海外で多く採用されており、海外製の設備を安価に入手できる(日本製はオーダーメイドとなる)。
 - 大規模な施設であることから、従業員の作業状況を把握するため、携帯端末によって収穫量などを管理している。地元の方は、時期によっては漁業に従事しているなど、短時間勤務の需要が多く、そうした需要に沿った勤務形態を採用している。農業は人手不足であるため、多くの方が働きやすい環境を整えることが重要である。
 - こうした施設の整備に当たっては、栽培に適した地域であることと、地元の方々のご理解を得られることという観点から、適切な土地を確保することがまず重要である。



橋本代表取締役からの説明



農園内の見学

➤ (所感)

- ・被災跡地のスペースを活かし、また日照条件も良いという土地柄を活かした生産技術高度化施設が稼働していることはとても心強く感じた。
- ・働く環境としての好条件(身体的な労働負荷が軽減されていること、労働時間が沿岸の人に合わせて短時間労働が可能になっていること)も、多くの方が働ける状況を実現されていた。
- ・今後は、このような一次産業が増えてくる可能性を十分に感じ、被災地沿岸だけでなく広く広まると良いなと思う。

③ 陸前高田市

高田松原津波復興祈念公園

陸前高田市土地区画整理事業

東日本大震災津波伝承館

視察先概要:

【高田松原津波復興祈念公園・東日本大震災津波伝承館】

東日本大震災による犠牲者への追悼と鎮魂、震災の記憶と教訓の伝承、国内外に向けた復興に対する強い意志の発信の場として、国・岩手県・陸前高田市により整備。令和元年9月22日、国営追悼・祈念施設の一部、東日本大震災津波伝承館(いわて TUNAMI メモリアル)、道の駅「高田松原」の供用を開始。令和2年度末を目途に全体完成予定。

【陸前高田市土地区画整理事業】

最大水位 17.6メートルの津波により、市内全体で全半壊戸数 4,047 戸が被害。計画戸数 1,954 戸中、令和元年度末現在、約 97%が完成。令和2年度に 54 戸を整備完了予定。農業再生・地方創生の新たな試みとして、産官学連携によるピーカンナッツの栽培や有機農業のテーマパーク建設などを計画。

- 戸羽陸前高田市長からの説明の概要は、次のとおり。
 - リアス式海岸特有の地形から、急傾斜の山が多く土砂災害の危険があるため、中心市街地の再建に際しては、山側への移転でなく土地区画整理事業を利用して原位置でかさ上げした。
 - しかし、避難者を含め全国に散らばっている地権者の同意を得るのに時間がかかった。その結果、住もうと決断していた人も事業の完了を待つことができず、別のところに移ってしまい、空き地ができてしまった。事業途中での計画縮小が難しく、また工事に入るためには地権者の同意を得る必要があったが、それが大変であった。
 - 南海トラフ地震など他の災害でも同様の問題が起こる可能性があるため、短期間で手続きを進めることができ、事業途中で状況変化に対応できる土地区画整理事業に改善してほしい。
- その後、東日本大震災津波伝承館を視察。立花副館長からの説明の概要は次のとおり。
 - 東北を襲った津波の歴史をひもとくゾーン、被災した実物の展示を通じて津波被害の事実を伝えるゾーン、震災時の人々の行動をひもとくことで命を守る教訓を伝えるゾーン、支援への感謝の気持ちや震災を乗り越えていく被災地の姿を伝えるゾーンで構成。
 - 東北は津波常襲地であるが、海は恵みを与え文化も育む存在。津波が来るなら別の土地に移住したらよいという意見もあるが、知恵と技術で一緒に乗り越えていけるのではとの考えが東北では脈々と続いている。「命を守り、海と大地と共に生きる」をテーマに伝えていきたい。



戸羽陸前高田市長からの説明



東日本大震災津波伝承館の視察

➤ (所感)

- ・県外からも、国外からも多くの人が来ていると思うが、国と県、市町村が連携してシンボルとしてこの場が整備されたことはとても素晴らしいと改めて感じた。
- ・もっと身近に、気軽に鎮魂、慰霊だけでなく、憩いの場としてもなじんでほしいと思うが、広いうえにベンチなどなく、高齢の方は歩くだけでも大変そうであった。意図してベンチ等設置していないのかもしれないが、あったほうがよいと私は思った。よろしくお祈りします。